

糸機仕事と「はたらく棒」

宮本八恵子

1. はじめに

糸機仕事では、さまざまな棒が随所に登場する。棒使いの上手下手が、織りあがる布の良し悪しにもかかわる。布つくりの最終段階である機織りに使用する織り機は、まさに、棒の集合体であり、織り手の身体と棒が巧みに連動し合うことで布が織りあげられていく。

棒は、それ単体ではただの棒に過ぎない。しかし、糸機仕事においては、棒が糸や人と会うことによって単なる棒から「はたらく棒」へと変身する。

本稿では、まず、布つくりの技法である「編む」と「織る」について述べ、続いて、織り機の変遷と、そこに用いられる棒の種類と本数がいかに増えていき、それに伴って織り手の身体への負担がいかに軽くなっていったかについて、図を交えて解説する。また、糸機仕事では、その最終段階である「織る」に到達するまで、さまざまな糸の支度の工程があり、そこでも多くの棒が大切な役割を担う。その実例として、現在、所沢市山口民俗資料館で行なわれている所沢緋の復元を取り上げ、経糸の支度における「棒使いの技」を紹介する。

2. 編布と織布

編布 布つくりの技法には、「編む」と「織る」があり、先行したのは前者である。編むことによってつくられる「編布」は、縄文時代の遺跡からもその小片が発見されており、古いものは前期まで遡る。また、土器底部には編布の圧痕が確認できるものもある。新潟県の十日町市や津南町では、近代に入ってから「越後アンギン」と称する編布の衣服が用いられ、現在もその技術が伝承されている。

編布のつくり方は図1のようであり、コモツチと呼ばれる錘2本に経糸を巻き、2本を前後に動かして緯糸を締めながら振り編みにする。筵や俵、簾を編むのと同じ方法である。素材にはカラムシ（苧麻）などの植物繊維が用いられた。

織布 編んでつくられる編布に対し、織ってつくられる布を「織布」という。織布の技術は、縄文時代の終わり頃、水稻栽培と共に大陸から伝えられたというのが通説となっているが、編布から変化した国内自生説を唱える研究者もいる。つまり、編布の経糸2本を前後に動かす際、左振り

りを1段ずつ交互に繰り返すと、振り編みが平織へと変化するのである[尾関 1996]。大陸伝来か、はたまた編布からの変化か、現時点では断定はできないが、後者の可能性も否めない。

織布が編布と大きく異なる点は、編布が経糸を動かして緯糸を締めるのに対し、織布は経糸を張って両端を固定し、アヤを交互に開口しながら緯糸を通していくことである。経糸の両端を固定するには、経巻き具と布巻き具の2本の棒が必要となる。また、織布はアヤがあってこそ実現するものであり、そのアヤを開くのも、また棒である。図2のように、経糸の奇数本と偶数本を1本置きに板状の棒ですくい取り、上糸と下糸とに分けることで経糸のアヤは交互に開かれる。しかし、経糸を1本置きに1段ずつすくうにはたいへんな手間がかかる。そのため、織布の技術がもたらされた後も、急速な普及をみることはなく、編布との共存時代がしばらく続

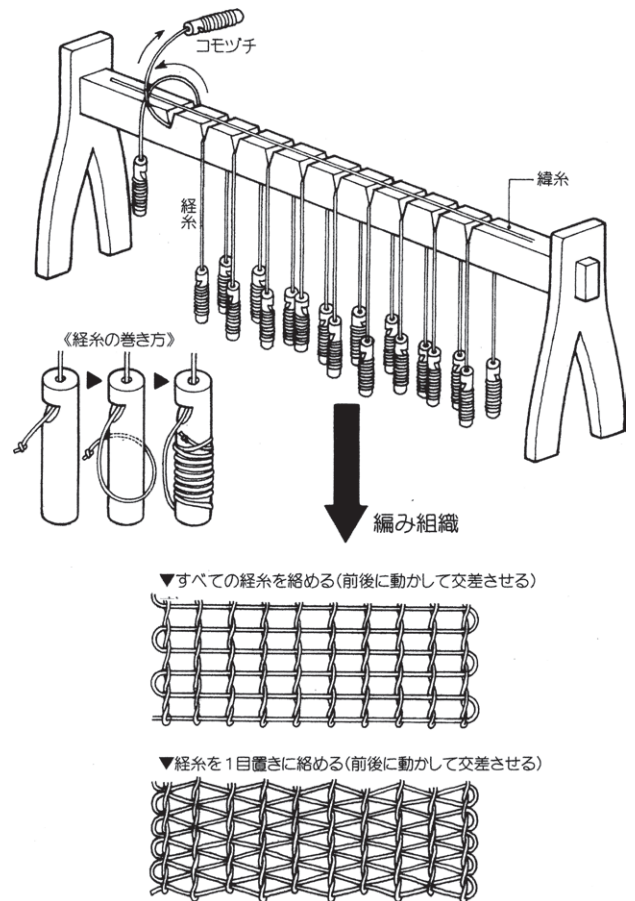


図1 編布のつくり方

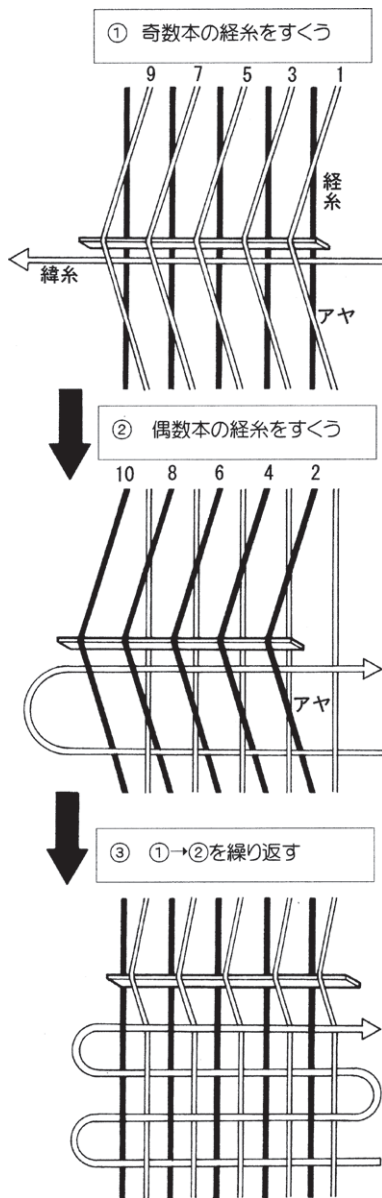


図2 織布のつくり方

いたといわれる。

綜統の発明と織布の普及 編布から織布への転換が一挙に進んだ背景には、綜統の発明がある。綜統は、図3のように棒と糸を用いて経糸を1本置きにすくい取るものであり、これに中筒と呼ばれる断面が円形もしくは三角形の棒を併用することで、経糸のアヤは一斉に開口される。綜統の棒を引き上げればアヤの口は上側に開き（綜統開口）、戻せば、中筒の分だけ下がって下側にアヤの口が開く（中筒開口）のである。それまで手ですくい取っていた経糸に綜統が備わったことで、織る能率は著しく向上し、同時に織布の技術も広がりを見た。弥生時代の遺跡から発見される土器底部の圧痕は、そのほとんどが平織の織布であり、併せて、織り機の部品も出土している。弥生時代には、編布に代わって織布の時代が到来したといえるであろう。

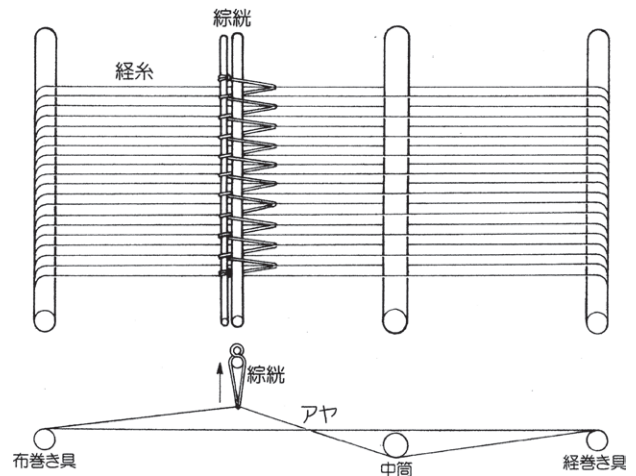


図3 綜統

3. 織り機の変遷と棒のはたらき

原始機 織り機の基本構造は、主運動の「開口具」「緯入れ具」「緯打ち具」、副運動の「経巻き具」「布巻き具」から成る。

弥生時代の原始機は、図4のように綜統と中筒を開口具とし、これらで経糸を上糸と下糸とに分けてアヤを開く。綜統は片口開口であり、棒と糸を用いて下糸をすくい取り、これを引き上げたり下ろしたりしながらアヤを上下交互に開いていく。引き上げたときには、板状の棒をアヤの口に立て、開口を安定させる。

緯入れ具の杼は板状の棒で、これに緯糸を巻き、アヤの口に通す。織り目を詰める緯打ち具は、長辺の一辺が鋭角にとがった刀状の棒で、鋭角を手前にして緯糸を打ち込む。経巻き具と布巻き具はいずれも太めの棒が用いられ、織り手は両足で経巻き具を突っ張り、同時に布巻き具を腹に密着させ、紐で腰に回して固定する。まさに、織り手の身体が織り機の一部をなしており、身体と幾本もの棒たちが連動することで織り機が機能する。織り手の身体に備わる手・足（脚）・胴体という「生の棒」も、織り機の一部としてはたらいているのである。ゆえに、「からだ機」とも称される。

手も、脚も、腰も、まさにフル回転。そのため、織り手の身体にかかる負担も大きい。

地機 古墳時代の5世紀頃には、大陸から朝鮮半島を経て渡来人によって織物の新技術が伝えられ、奈良時代初期の和銅年間（708～714）には、畿内及びその周辺から各地へとその技術が広まった。それに伴って織り機の改良も進み、ここに地機が誕生するのである。

地機は、原始機に機台を備えたもので、これには図5のようにマネキと呼ばれる湾曲した棒の綜統操作具が取り付けられている。また、経巻き具のオマキ（緒巻）は機台の腕にのせることで固定され、原始機のように織り手が足で突っ張る必要はない。織り手は、マネキに連結する足繩に利き足を掛け、引いたり伸ばしたりしながら綜統を上下交互に開口す

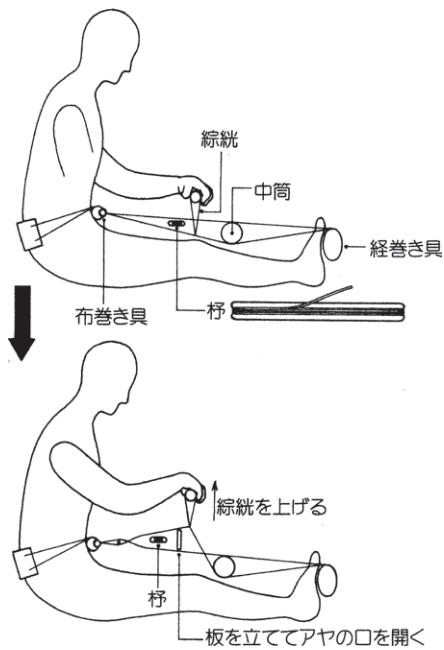


図4 原始機の構造

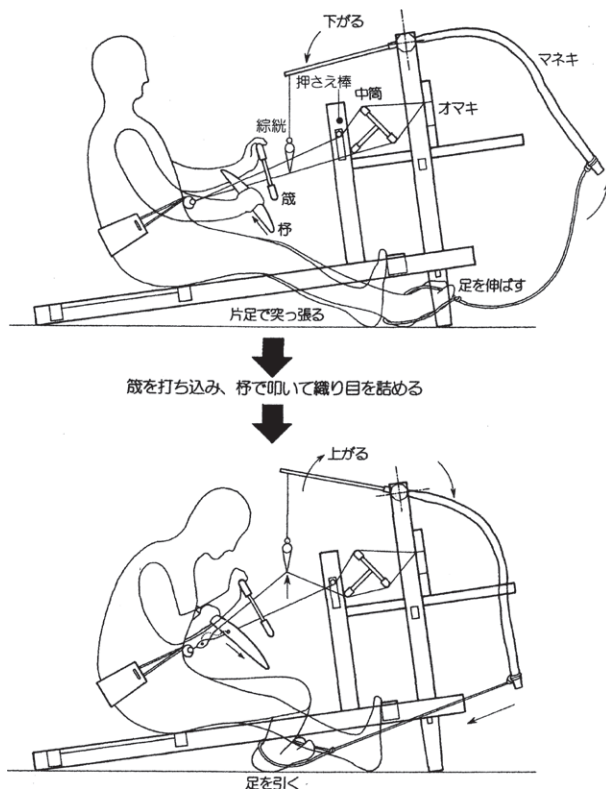


図5 地機の構造

る。その際には、もう片方の足で機台の横木を突っ張り、身体を安定させる。

綜統の開口には、中筒と共に押さえ棒の存在が欠かせない。中筒は原始機と同様のはたらしをするが、押さえ棒は足繩を引いて下糸を上げたとき、中筒と綜統との間にアヤをつくる役目を果たす。押さえ棒無くしてはアヤができず、開口も叶わないのである。

地機を構成する棒の本数は、原始機に比べてはるかに多い。そして、棒の増加と反比例するように、織り手の身体にかかる負担は軽減された。但し、綜統は原始機と同様1枚であり、片口開口の方法に変わりはない。2枚綜統の実現は、後述する高機まで待たなければならなかったのである。

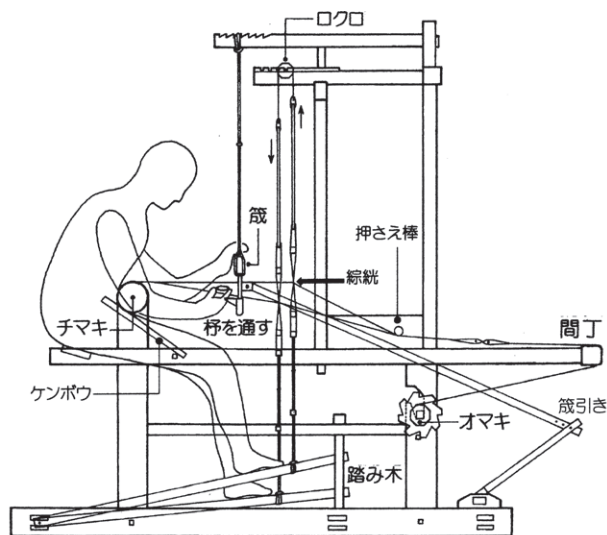
地機の杼は、原始機のような板状の棒ではなく、長辺の一边が鋭角に尖った刀状であり、ゆえに刀杼とも称される。これは、緯糸を通すと共に打ち込む役目も兼ねており、緯入れ具が同時に緯打ち具ともなる。織り機のみならず、これに付属する機具も進化をみたのである。さらに、地機には箆が付属し、これは経糸を梳かして織り幅を整える役目を果たす。

高機 高機は、細い絹糸を高密度に織るため開発されたもので、中世末期から近世初期に明（中国）より貿易港の境を経て京都西陣に伝えられ、その後、職工の移住や西陣への技術修習、藩主や商人による技術移植などを背景に近世中期以降各地に広まった。

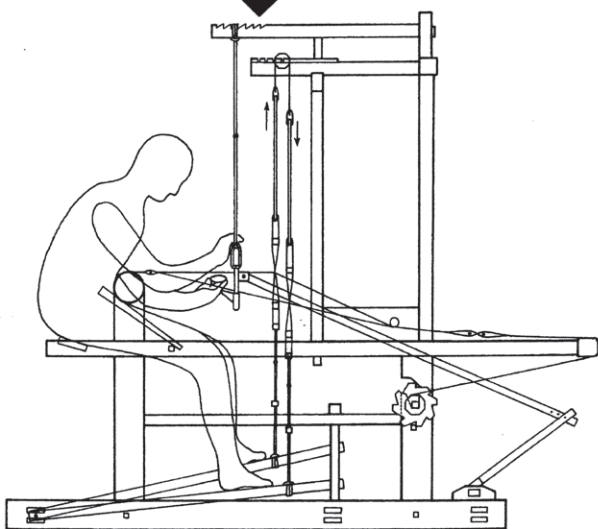
高機の特徴は、間丁^{けんちよう}までの距離が十分にあり、経糸を長く張れることである。絹糸は1本の長繊維（フィラメント）であり、その張力を一定に保ち、尚且つアヤの開口を安定させるには経糸を長く張る必要があった。また、近世中期以降に国内で綿花栽培が本格化すると、綿織物の製織にも高機が普及し、これは、短繊維（ファイバー）の綿糸に対応すべく間丁までの距離が短くなった。

高機では、経巻き具のオマキ（緒巻）と布巻き具のチマキ（千巻）を機台に据え、梃子の原理を利用したケンボウを締めることによって経糸をピンと張る（図6）。また、綜統は2枚あり、両者を紐などでつないで機台上部のロクロから吊るし、それぞれを2本の踏み木に連結する。織り手が踏み木を交互に踏むと、ロクロから吊るされた2枚の綜統は上下交互に開口を繰り返す。つまり、両口開口である。原始機や地機は、いずれも1枚綜統を用いた片口開口であり、これは下糸にかかる負担が大きかった。しかし、両口開口は2枚の綜統にかかる負担が等しく、同時に、経糸の張りも一定に保たれる。

緯入れ具と緯打ち具の機能分化も高機の特徴といえる。緯入れ具の杼は小型化し、緯糸を経糸のアヤの口に通すのみの機能となった。緯糸を打ち込むのは箆の役目である。箆はオサヅカ（箆柄）にはめられ、箆柄は箆引きの棒で機台に固定される。したがって、緯糸を箆で打ち込むと、箆は箆引きに引っ張られて即座に元の位置へと戻る。地機のように、打つも戻すも手で操作したのに比べて格段の労力削減である。尚且つ、箆の安定度も高い。



箆を打ち込んで織り目を詰める



足を踏み替える
図6 高機の構造

経糸を張るオマキ・チマキ・ケンボウ、綜統を吊るすロクロ、綜統を引く踏み木、さらに、箆を支え位置を定める箆柄と箆引き。これらの棒のはたらきによって、織り手の身体は織り機から完全に開放された。織り手は、2本の踏み木を交互に踏みながらアヤを上下に開閉し、その開口部に緯糸の杵を通し、箆で叩いて織り目を詰める。その動作に余計な力はいらない。「はたらく棒」たちと呼吸を合わせ、棒の動きに身体を添わせつつリズムを保てばよい。また、高機では、織り手はやや前屈みの姿勢を取って杵を通す部分に視線を合わせるが、このとき織り手の腹部はチマキに支えられて安定を得る。かつて織り手の身体を酷使した織り機が、高機ではむしろ身体の助けにさえなっているのである。

原始機から地機、そして、高機へと進化を遂げた織り機。その背景には、「張る」「吊るす」「引く」「支える」などの機能を有する棒たちの増殖があり、棒のはたらきによって織り手の身体は織り機から解放され、かかる負担も著しく軽減された。織り手は織ることのみに集中できるようになり、結

果、織物の品質も向上したのである。

4. 所沢紉の復元にもみる棒使いの技

所沢紉の歴史と製作技術の復元 江戸時代末期の文化年間(1804~1818)、現東京都側の旧多摩郡村山地方に誕生した木綿の紉は「村山紉」と称され、維新前後より現埼玉県側の旧入間郡山口地方へと伝播、狭山丘陵一帯で生産されるようになった。その取引市場が所沢であったことから、集散地名を冠した「所沢紉」として広く世に知られ、明治39年(1906)には年産120万反を記録して全盛期を迎える。しかし、売れ行きの良さに乗じた粗製濫造や小規模機屋が中心ゆえの柄行のマンネリ化、量産体制の遅れなどが原因となって次第に売れ行きは下降線をたどり、昭和初期には世界恐慌のあおりを受けて大暴落へと陥る。さらに追い打ちをかけたのが山口貯水池(通称・狭山湖)の建設であり、これによって主産地の村が湖底に沈むこととなった。住民の移転は昭和4年(1929)から5年(1930)に行なわれ、これを機に紉製造に見切りをつけた機屋が少なくない。また、その後も売れ行きの回復は期待できず、昭和13年(1938)頃を最後に所沢紉は生産の歴史に幕を閉じたのである。

筆者は昭和58年(1983)より、かつて機屋を営んでいた中村義平さん(明治39年生)と妻のフジさん(明治42年生)、同じく中村美代治さん(明治41年生)と妻のヨネさん(明治42年生)に聞き取り調査を行ない、昭和61年(1986)、その成果を『所沢飛白』と題する本にまとめて自費出版した。また、平成元年(1989)には、所沢市教育委員会社会教育課の事業として、上記4人による所沢紉の復元が実施され、その工程は動画で記録された。しかし、年を追うごとに所沢紉製造の経験者は次々と鬼籍に入り、その技術伝承が危ぶまれることとなった。そんなとき、筆者は所沢市在住(当時)の染織家・小峰和子さん(旧姓田口)と出会い、平成13年(2001)より共に所沢紉の復元を開始した。復元は、所沢市教育委員会に保管されている所沢紉の見本切れ(平成26年度に所沢市有形民俗文化財に指定)をもとに糸の本数を算出し、紉糸づくりから始める。それは毎回試行錯誤の連続であり、これまで伝承者に聞き取り調査を積んできたとはいえ、いかに聞き洩らした点が多かったかを痛感している。

所沢紉の製作工程 前述したように、織り機を使った機織りは糸機仕事の最終段階であり、それまでには244ページの図7に示す通り、数多くの支度の工程を経なければならない。経糸の支度は、どれひとつも疎かにはできない。ひとつの工程での失敗が、次の工程に如実に響くからである。また、支度の工程には随所に棒が登場し、とりわけマザキとハタマキ(機巻き)では多数の棒を駆使用する。

ここでは、平成31年(2019)から令和2年(2020)にかけて行なわれた復元第5作目の所沢紉「幅に三つの糸棒」を例に、マザキ、ヒキチガイ(引き違い)からハタマキ、及びアヤ返しからヒッコミ(引っ込み)の作業における「棒使いの

技」を紹介する。

緋の柄行は、織り幅に配される緋文様の数で表現され、十代の娘は「幅に三つ」や「幅に四つ」、新嫁は「幅に六つ」や「幅に八つ」、子どもを持つと「幅に十」から「幅に十四」、三十代は「幅に二十」、中年から年配者になると「幅に四十」や「幅に五十」あるいはそれ以上というように、年齢を重ねるごとにその数が増え、柄行も地味になっていった。また、男性の緋は子どもを除いて全般に小柄で、一見すると無地のような「幅に百」や「幅に百二十」のような超小柄もつくられた。

復元第5作目となる「幅に三つの糸枠」は、少女向けのもので、所沢緋の中では最も大柄となる。文様ひとつを構成する経と緯の緋糸は図8に示すとおりであり、これを一幅に六つ配し、引き違いにすることで「幅に三つ」とする(図9)。引き違いとは、文様を一つ置きに半段ずつずらすことで、これを機屋は「ぐに引く」という。意味は定かでないが、一説には矢を射る際に弓弦を引く形に似ているからともいわれる。

マザキの棒使い マザキはハタマザキとも呼ばれ、経の緋糸と地糸を順に並べ替えて緋文様をつくりあげる作業である。経糸は、地糸と緋糸をそれぞれ別に支度し、染めて糊付けをするので、緋糸は緋糸、地糸は地糸の固まりで束になっている。これを1本ずつほぐしながら並べ替えていく。「幅に三つの糸枠」の場合は、経の緋糸が「コマキ(小巻き)」と「ヤハズ(矢筈)」の2種類で、これをフタッタテと称する。このフタッタテの緋糸に、「オオマキヤハズ(大巻き矢筈)」「ミツヤハズ(三つ矢筈)」「チュウマキヤハズ(中巻き矢筈)」の3種類の緯の緋糸をのせることで糸枠の文様が織りあがるのである。したがって、マザキで糸の本数を間違えると、緯糸をのせたときにズレが生じ、傷物の緋となってしまふ。ゆえに、作業は慎重が期される。

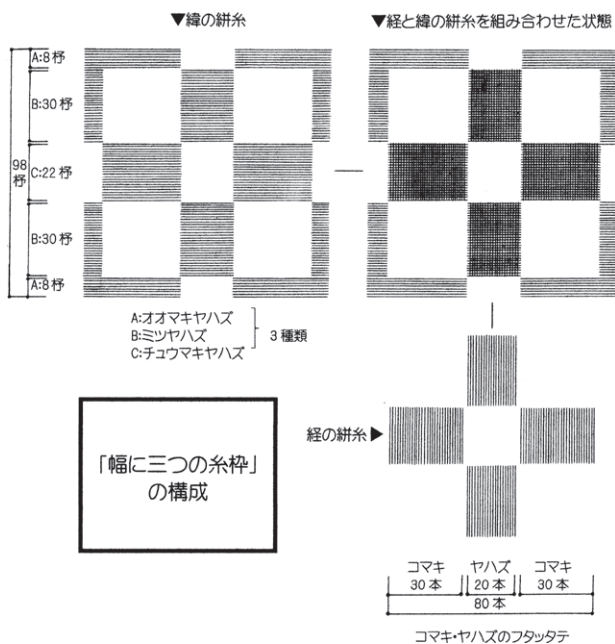


図8 「幅に三つの糸枠」の緋糸の構成

図10は、平成元年(1989)の復元において中村美代治さんが行なったマザキの方法を図化したものである。筆者らも、この方法に倣ってマザキを行なった。美代治さんの方法では緋糸は1種類であるが、「幅に三つの糸枠」はフタッタ

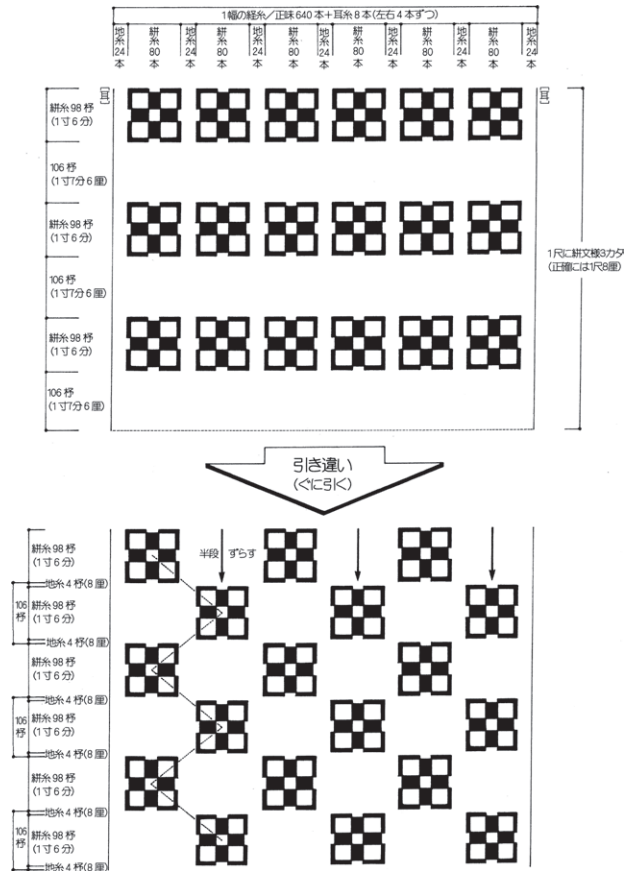


図9 「幅に三つの糸枠」の緋文様の配列と緋糸・地糸の本数

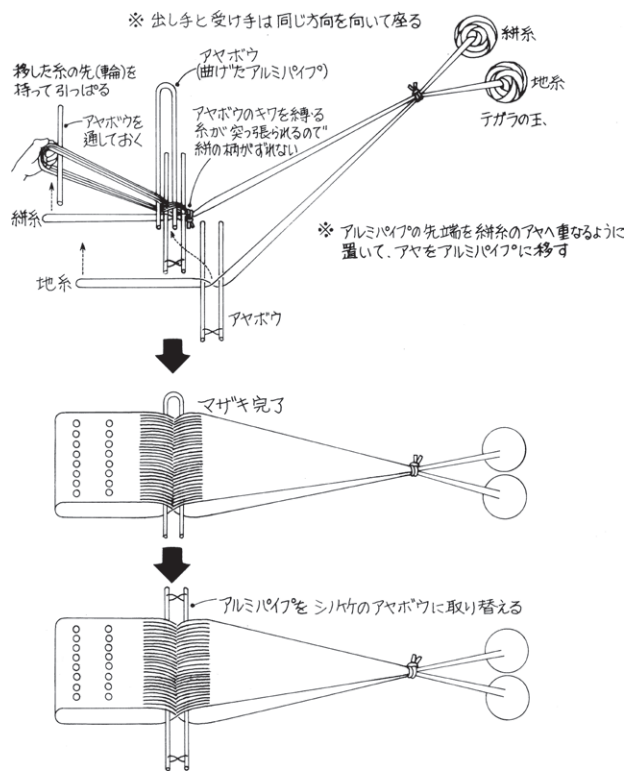
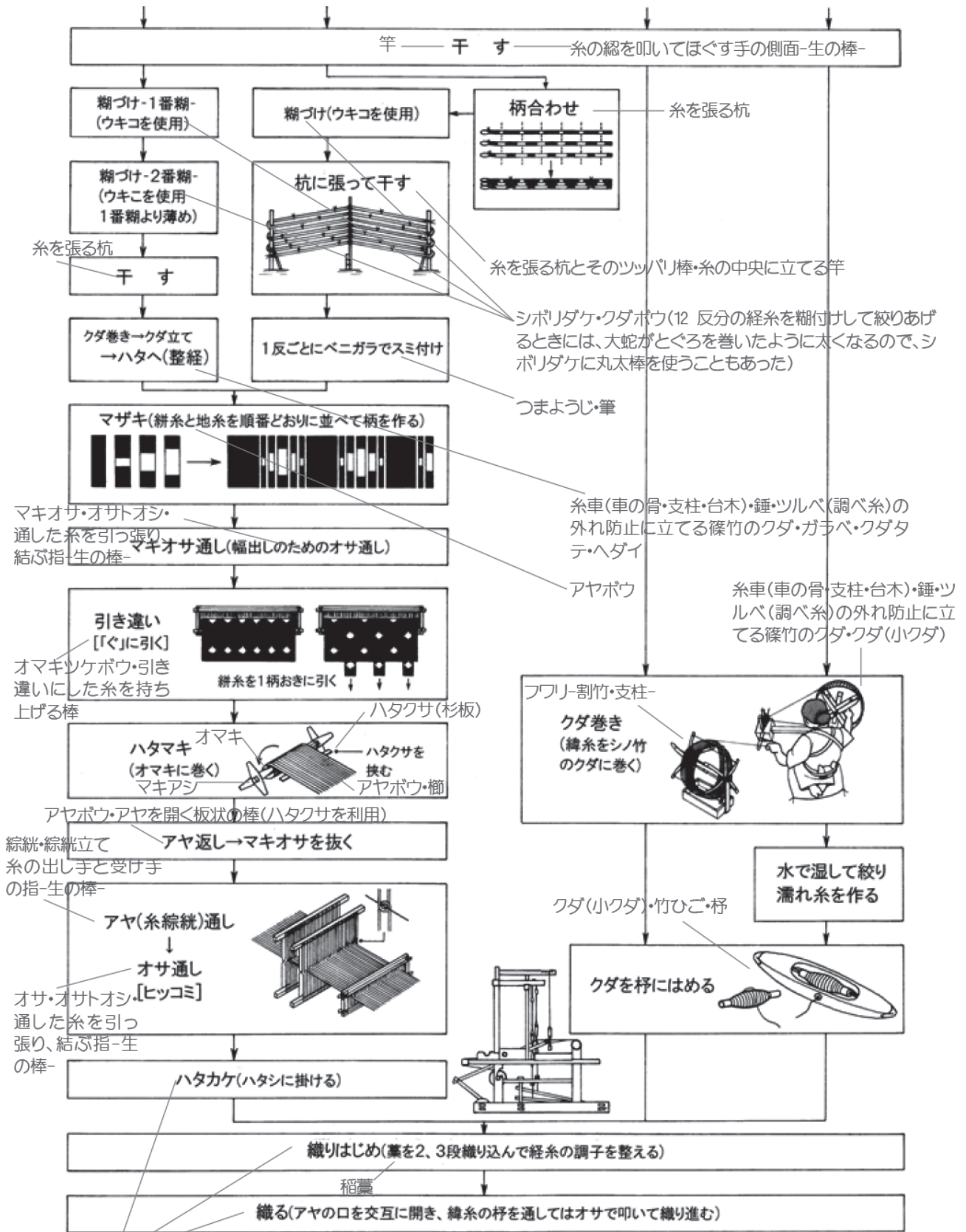


図10 マザキの棒使い



ハタシ[高機]-ハタシは棒の集合体-

テ、つまり、2種類の緋糸を用いるので、緋糸の束はもう一つ増える。

マザキでは、地糸と緋糸それぞれのアヤに棒（アヤボウ）を通し、さらにもう1組のアヤボウを用意して、ここへ順に地糸と緋糸を必要な本数ずつ送っていく。その際には緋の文様がずれないように、緋糸をアヤボウの際で縛っておく。こうすれば緋糸が突っ張られるので、文様がずれることはない。

美代治さんは平成元年にマザキを行なったとき、こう話していた。「うちでは、ハタマザキは私のおふくろの仕事だった。私はその様子をいつも見ていたから、理屈はわかっている。だから、今回の復元でも私がハタマザキをやることになった。しかし、おふくろはこんなにたくさんの棒を使ってはいなかった。その理由がどうしてもわからない。理屈はわかっただけど、おふくろの方法と私のマザキは違う。おふくろは、こんなに棒は使わなかった。」

美代治さんが盛んに悩んでいたのが思い出される。今となってはその技術を確認する術はないが、とにかく筆者らは美代治さんの方法に倣ってマザキを行なっている。

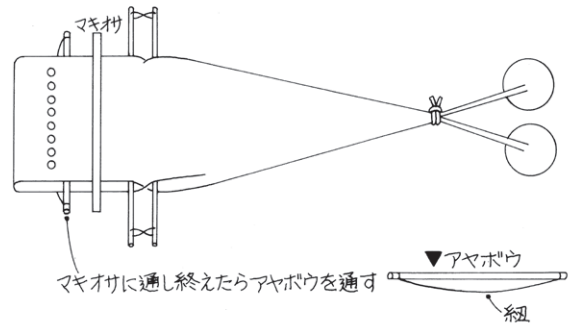
ヒキチガイからハタマキの棒使い マザキが終わると、経糸をマキオサ（巻き箆）に通す。マキオサは、次に控えるハタマキ（機巻き）の作業で経糸を梳かし、併せて、アヤをスムーズに進ませる役目を果たす。

マザキが終わった時点では、緋文様は一列に並んでおり、これを一つ置きに半段ずつずらすことで一幅の文様が整う（図11）。この作業をヒキチガイ（引き違い）といい、機屋では「ぐに引く」とも表現される。半段ずつずらすには、オマキツケボウ（縮巻付け棒）と呼ばれる角材が用いられる。オマキツケボウは、経巻き具のオマキの溝にはめるもので、文様の大きさに応じて数種のサイズがある。このオマキツケボウに、引き違いにする緋糸を一回しすると半段がずれる。その際に注意すべき点は、オマキツケボウに回した緋糸の文様を上糸と下糸できちんと合わせ、尚且つ緋糸を角材の角で締め縮めることである。そうしないとハタマキでオマキを回転させたとき、上糸と下糸の緋文様がずれてしまう（図12）。オマキツケボウを丸材ではなく角材にする理由もここにある。

アヤ返しからヒッコミの棒使い ハタマキが終わると、アヤ返しを行なう。ハタマキの時点まで、マキオサを挟んでその前後にアヤボウが通されており、アヤはマキオサの外側に位置しているが、これをマキオサの内側に移動してマキオサを抜くのである（図13）。

アヤ返しが済んでマキオサを抜いたら、次は支度の最終工程となるヒッコミ（引っ込み）に入る。ヒッコミは、経糸を綜統と箆（織るための箆＝織り箆）に通す作業で、まず綜統通しを行なう。受け手と出し手が呼吸を合わせつつ、2枚の綜統へ交互に経糸を1本ずつ通していくのである。これによって経糸のアヤの両口開きが叶う。綜統は、2本の角材に太い綿糸を絡めながらその中央を交差させたもので、その交点を受け手が人差し指と中指で開き、出し手が差し出した経糸を指の間に挟んで手前に引き抜く。これで交点に経糸が通る

マキオサ通し



ヒキチガイ（ぐに引く）

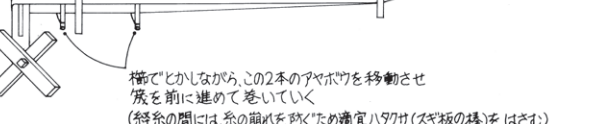
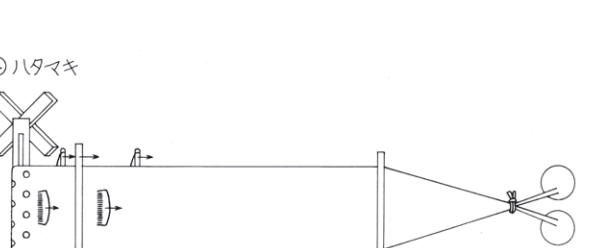
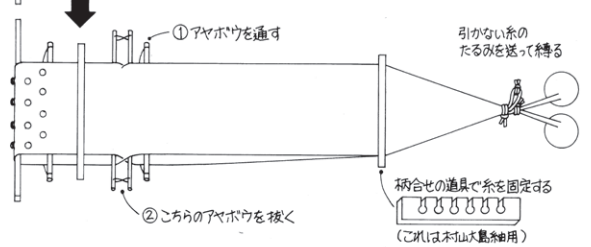
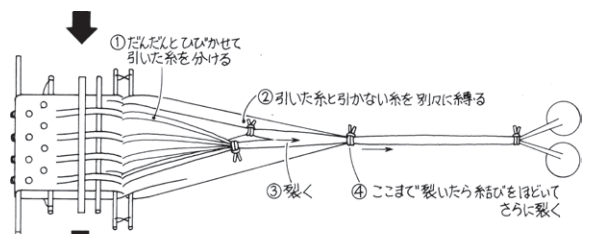
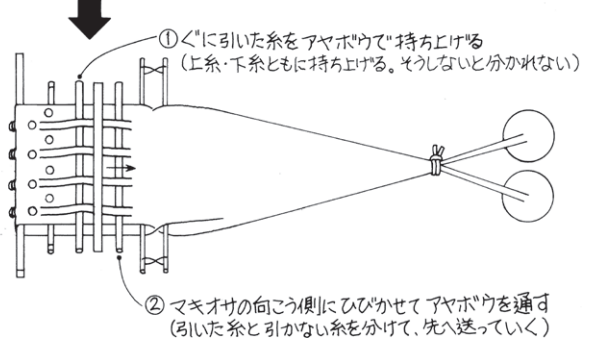
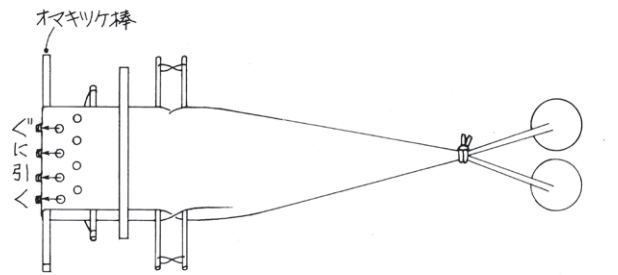


図11 マキオサ通し～ヒキチガイ～ハタマキの棒使い

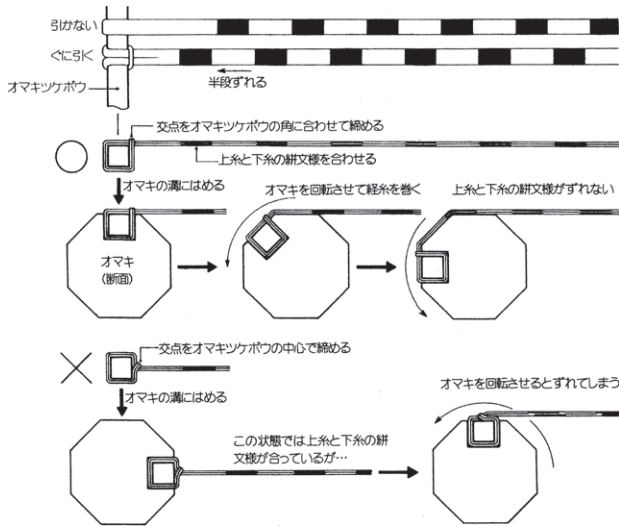


図12 引き違いにした組糸をオマキツケボウの角で締める方法

①ハタマキがすんだらアヤ返しをして、アヤをマキオサヒオマキの間に移動させる

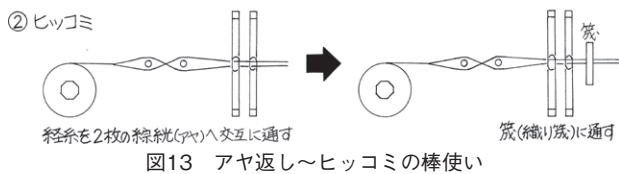
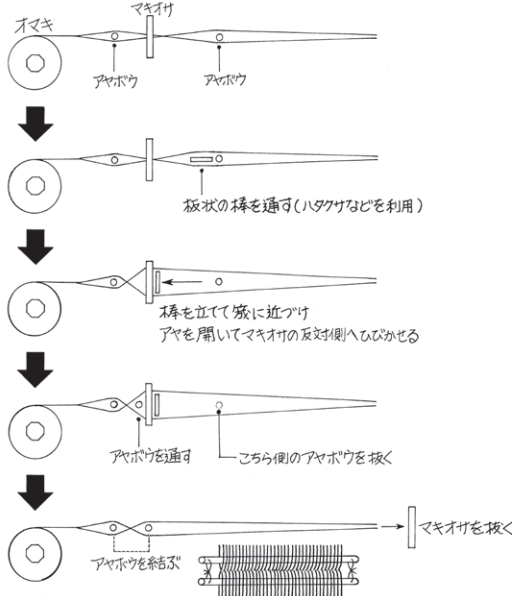
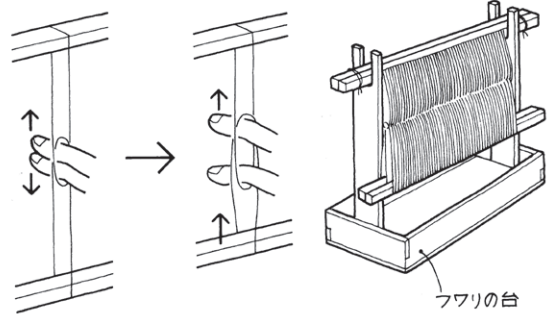
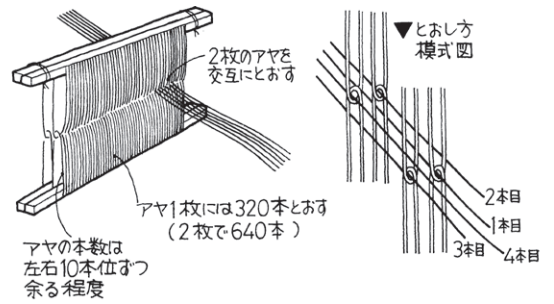


図13 アヤ返し～ヒッコミの棒使い

(図14)。「いち、に、いち、に」と唱えながら順番を間違えないように通すには、たいへん神経を使う。

綜統通しが終わると、次に織るための箆に通す。所沢緋の場合、経糸は上物が640本、並物が520本で、「幅に三つの糸枠」は上物とした。したがって、経糸は正味が640本となり、左右の耳糸を4本ずつ加えると648本となる。用いる箆は「十六算」で、1羽(1目)に経糸を1本ずつ通していく。所沢緋は別名「一本緋」とも称されるが、これは、箆1羽に経糸を1本ずつ通す片羽通しが由来である。ちなみに、久留米緋や伊予緋など緋産地の多くは「二本緋」と称し、箆1羽に経糸2本を通す諸羽通しの方法が採られる。

ヒッコミが終わると、いよいよ経糸を高機に掛けて織り始



▼ 糸のともし方 説明図

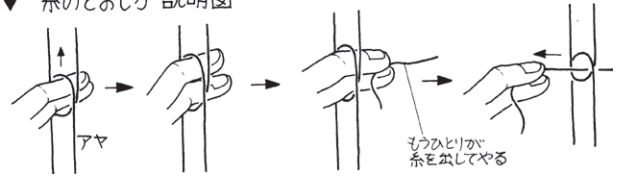


図14 綜統の形状と経糸の通し方

める。高機は、所沢緋の産地においてはハタシと称される。ちなみに、地機はシタハタと呼ばれる。

5. おわりに

平成元年(1989)の所沢緋の復元において、元機屋の妻であり、同時に織り手でもあった中村ヨネさん(明治42年生)は、経糸のハタマキ(機巻き)を行なうとき「糸のような心を持って、と親に言われたけど、その通り」と語っていた。糸は、途中で引っかかっても、丹念にたどってその「故障」を見つけ、解いてやれば必ず1本に戻る。故障をそのままにしておくと切れてしまう。人の心も同じこと。故障があったらそのつど直してまっすぐにすることが大切だという。名言である。

糸機仕事は、博物館などでも「面倒な仕事」として学芸員に敬遠されがちであり、その道のプロに託されることが多い。しかし、ヨネさんのように「糸のような心を持って」、糸を丁寧に取り扱えば、必ずトラブルは解消され、糸機仕事はゴールに達する。また、糸機仕事を滞りなく進めるには、糸を開いたり、支えたり、張ったりする棒の働きの欠かせない。糸と、多数の「はたらく棒」と、指や足など人の身体を構成する「生の棒」。この三者が奏でるリズムが心地よいとき、織りあがる布地も品質の良いものとなる。

筆者らの復元は、まだまだ未熟の域を出ないが、これからも糸使い、棒使いの技を、自らの身体をもって学びながら復

元を進め、その技術を後世に伝承していきたいと考えている。

なお、図7の所沢緋の製作工程には、各作業に登場する「はたらく棒」を細字で書き込んだ。実に様々な棒が使われていると、改めて驚かされる。

付録 アジアの「からだ機」

①南ラオスの「からだ機」と紋織

アジアの村には、現在も身体が織り機の一部をなす「からだ機」を使い、機織りを伝承している地域がある。

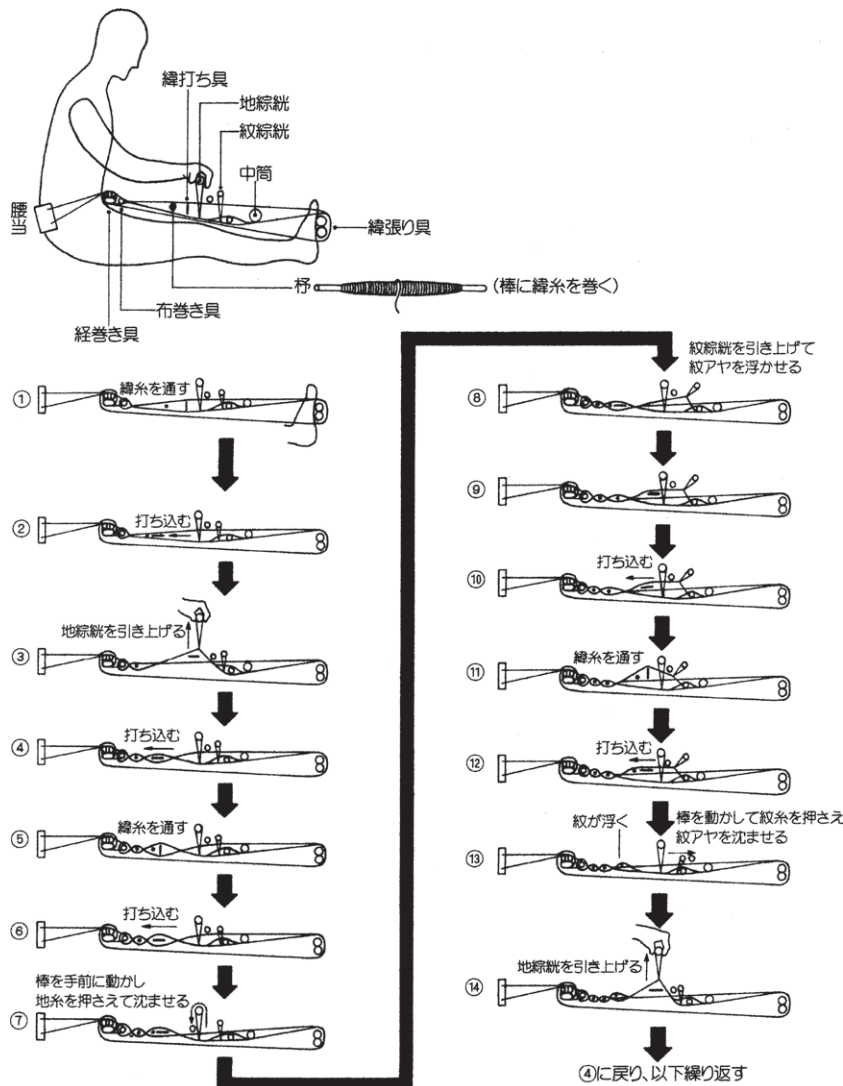
2018年、神野善治氏より南ラオスセコン県カンドン村・カトゥ族の間で伝承されている「からだ機」の機織り動画が届いた。織られている布地は色鮮やかな紋織で、織り手の女性は地綜統と紋綜統の両者を巧みに操作しながら文様を織り出している。アヤは、地糸と紋糸の双方にそれぞれ設けられ、文様を織る際には紋綜統のアヤを上下開口するための棒も伴う。その手さばきは非常に早く、図解は難を極めた。また、動画のみの情報では理解しがたい動きもある。筆者は、アジアや南米アンデスの伝統的機織りを研究している染織家

の小峰和子氏より、機織り工房「SOX」を主宰し、ラオスの「からだ機」での機織りを日本において伝承している工藤いづみ氏を紹介されたが、いまだ訪問が叶わず、織り手の手さばきと紋織のメカニズムを解明するには至っていない。ここでは、神野氏の動画をもとに作成した「からだ機」の綜統と棒使いの図を掲載し（図A）、さらなる疑問点の解明は今後の課題としたい。

②ブータンの片面縫取織

南アジアのブータンで伝承されている片面縫取織は、南ラオスのように地綜統と紋綜統を用いるのではなく、綜統は地綜統のみで、文様は縫取りの技法でつくられる。経糸を掛けたあとに、文様を入れるための経糸を2本の棒で拾い、この棒を動かすことで文様の経糸を浮かせ、ここに文様糸を通していくのである。できあがった文様は、刺繍のようになる（写真A）。

2020年6月7日と7月5日、前出の小峰氏に、ブータンの片面縫取織の整経とアヤ掛け及び織り方を実演していただいた。その工程は図B・図Cに示すとおりであり、図Bに



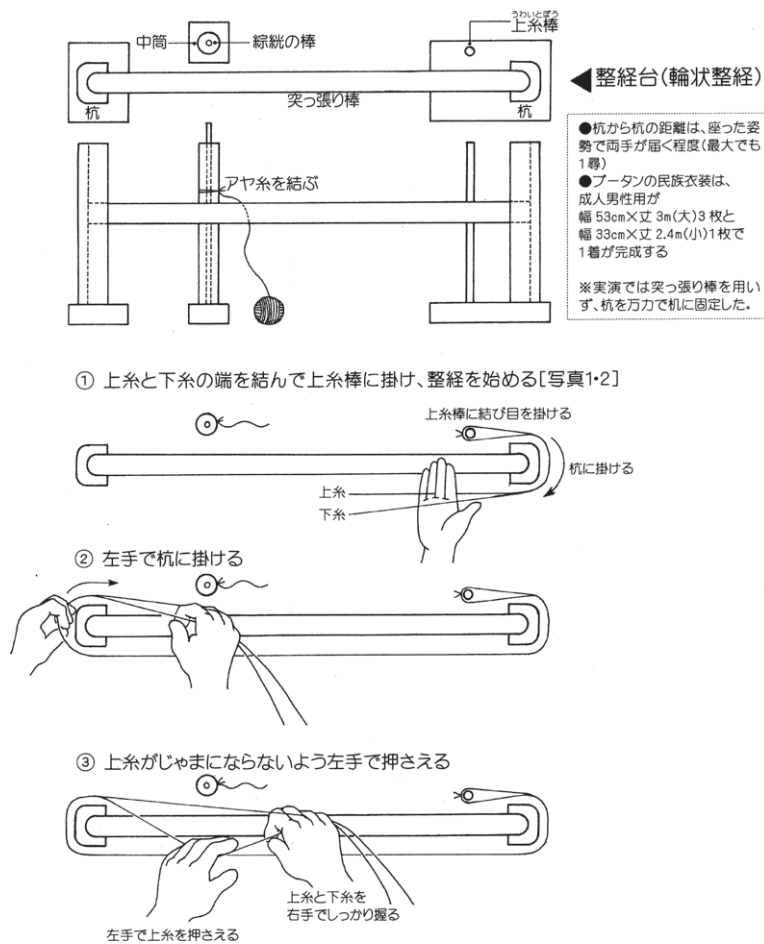
図A 南ラオスセコン県カンドン村・カトゥ族の「からだ機」と紋織の技法



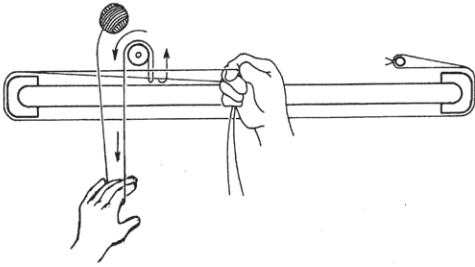
写真 A 刺繍のような片面縫取織のキラ (久保淳子『ブータン+北東インドアルナーチャル・ブラディッシュ染織・竹細工の旅報告書 2019 年版』ヤクランド 2019 より)

は写真 B の 1～13、図 C には写真 C の 1～9 が対応する。経糸は、経張り具の棒 2 本に回して二等辺三角形に張られるが、実演では経張り具の棒を 1 本とし、水平に経糸を張った。そのため、図 B と写真 B では経糸の張り方が異なっているが、織り方の仕組みに違いはない。また、布巻き具を腰で張るため、織り機の形式は「からだ機 (腰機)」の一種といえる。

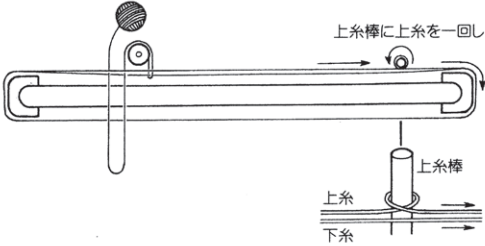
なお、写真 B・写真 C は、東大和市立博物館の梶原喜世子氏が撮影してくださった。



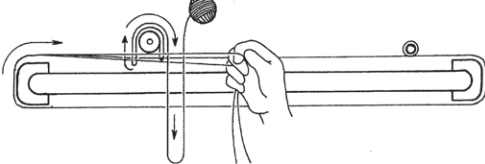
④ アヤ糸で下糸を拾って中筒に掛ける[写真3・4]



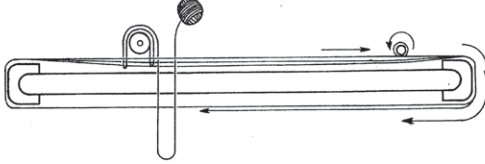
⑤ 上糸棒に上糸を一回しする-下糸は回さず杭に掛ける[写真5・6]



⑥ アヤ糸で下糸を拾って中筒に掛ける
-④の反対側を拾うことで振分綜統になる- [写真7・8・9]



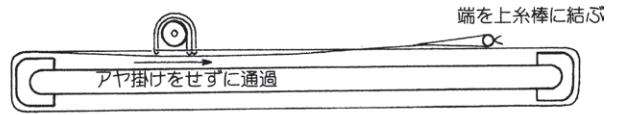
⑦ 上糸棒に上糸を一回しする-下糸は回さず杭に掛ける-[写真 10]



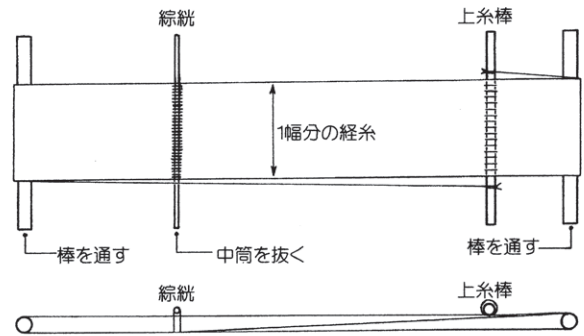
⑧ ④に戻り、以下繰り返して1幅分の経糸を整える

図B ブータンの片面縫取織の整経とアヤ掛け②

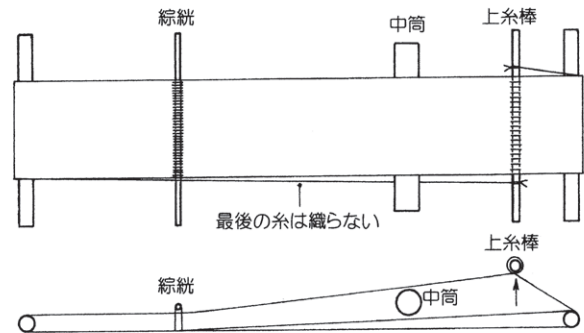
⑨ 経糸の最後はアヤ掛けをせず上糸棒に結ぶ[写真 11]



⑩ 整経台から下ろす



⑪ 上糸棒を上げて中筒を通す



■中筒開口



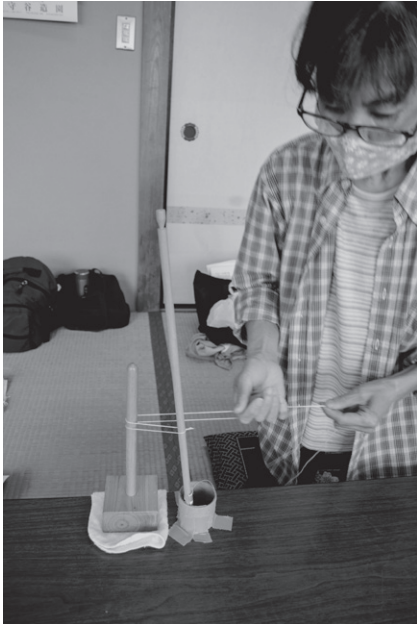
■綜統開口



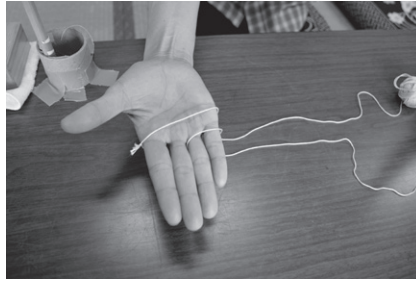
文様を入れるための経糸を2本の棒で拾う

図B ブータンの片面縫取織の整経とアヤ掛け③

写真B ブータンの片面縫取織の整経とアヤ掛け



1 上糸と下糸の結び目を上糸棒に掛けて整経を始める



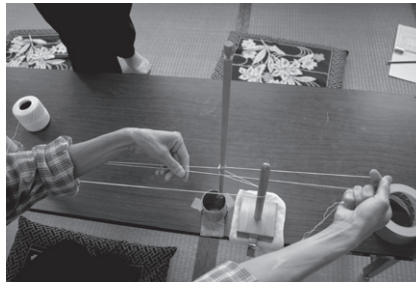
2 上糸は掌にのせ、下糸は指2本にのせる



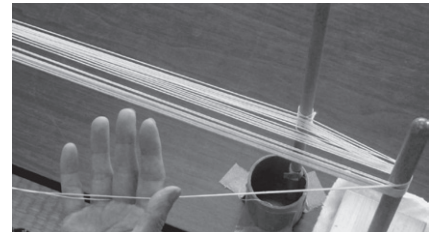
3 アヤ糸で下糸を拾って中筒に掛ける



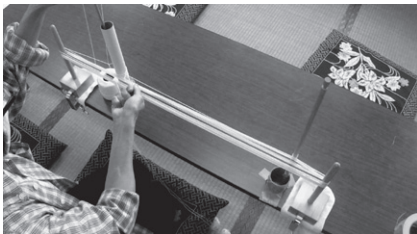
4 アヤ糸で下糸を拾って中筒に掛ける



5 上糸棒に上糸を一回りする(下糸は回さず杭に掛ける)



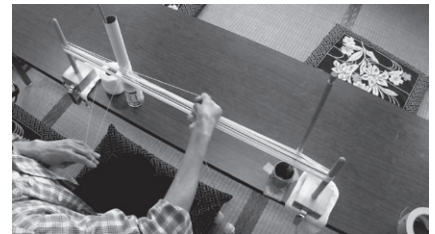
6 上糸棒に上糸を一回りする(下糸は回さず杭に掛ける)



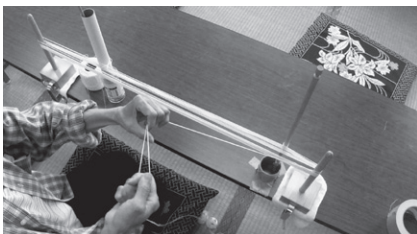
7 アヤ糸で下糸を拾って中筒に掛ける(振分綜統になる)



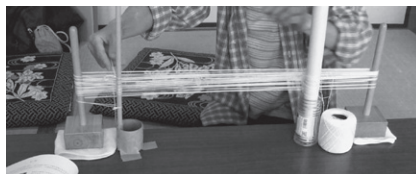
8 アヤ糸で下糸を拾って中筒に掛ける(振分綜統になる)



9 アヤ糸で下糸を拾って中筒に掛ける(振分綜統になる)



10 上糸棒に上糸を一回りする(下糸は回さず杭に掛ける)



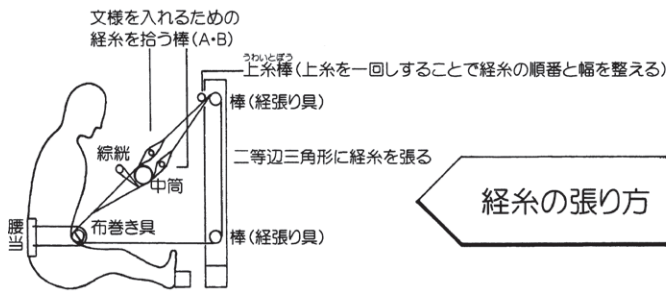
11 経糸の最後を上糸棒に結ぶ



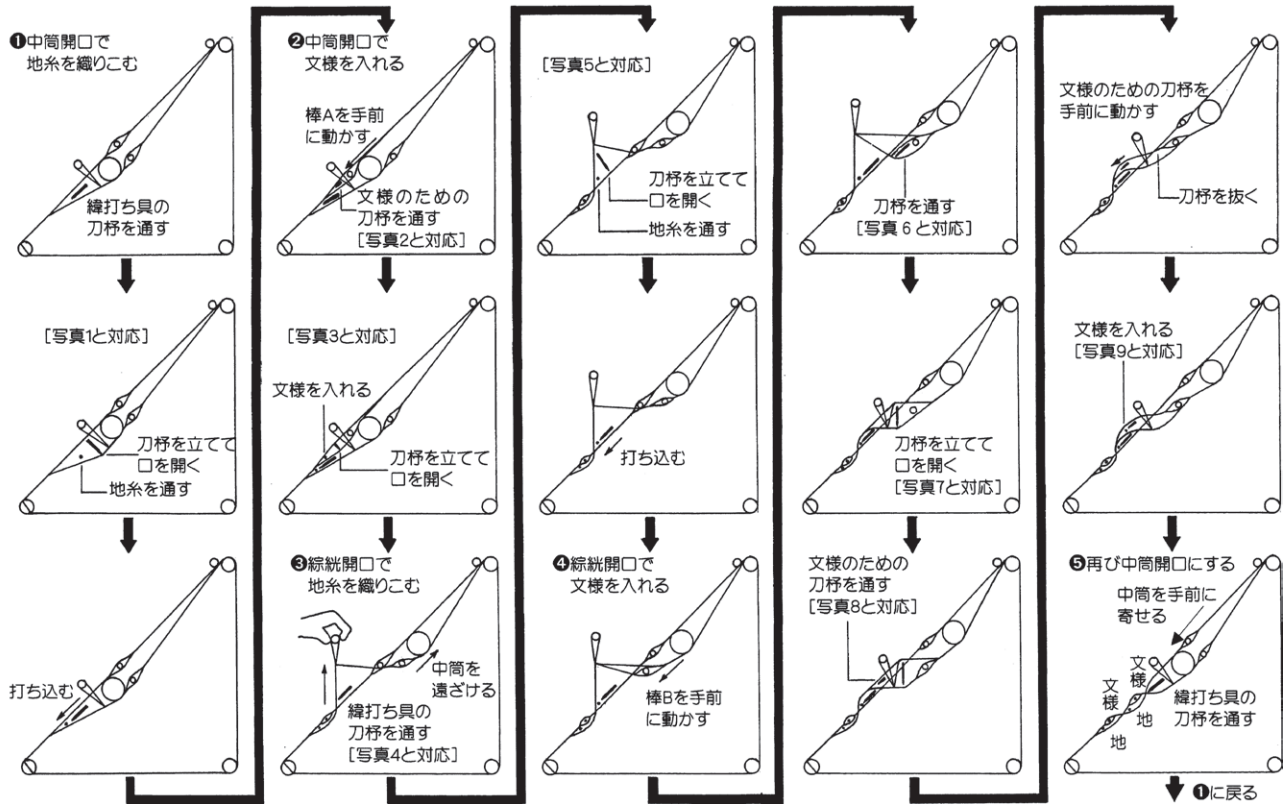
12 中筒開口



13 綜統開口

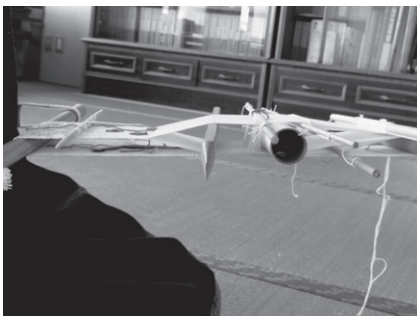


※実演では経張り具の棒を1本とし、経糸を水平に張った

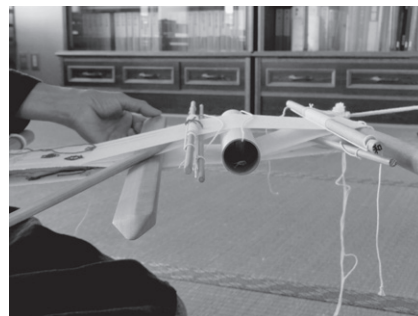


図C プータンの片面縫取織の織り方

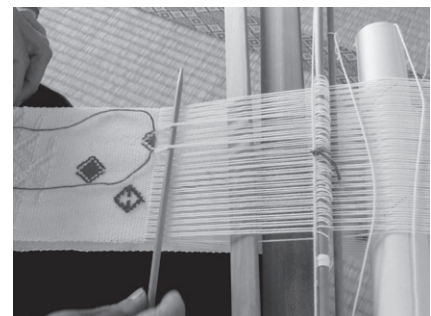
写真C プータンの片面縫取織の織り方



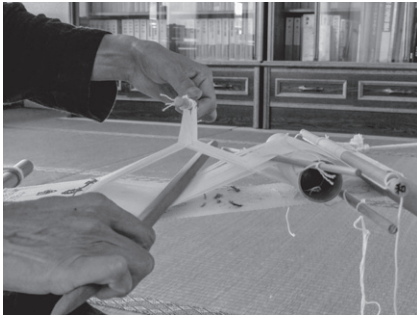
1 緯打ち具の刀杼を立てて口を開く
—中筒開口—



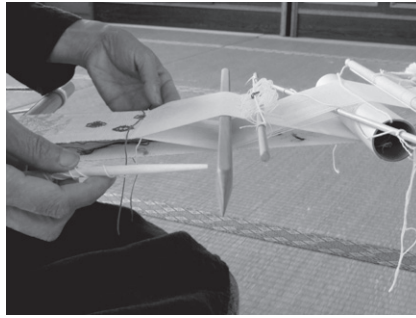
2 文様を入れるための刀杼を通す



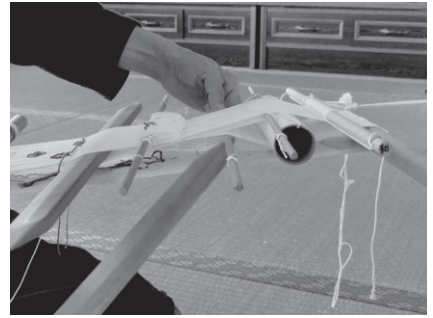
3 文様を入れる



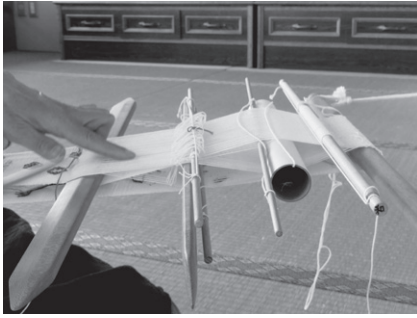
4 綜統を引き上げて緯打ち具の刀杼を通す



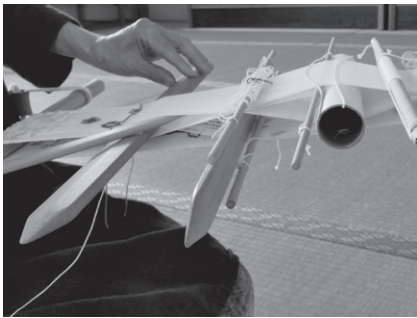
5 緯打ち具の刀杼を立てて口を開く—綜統開口—



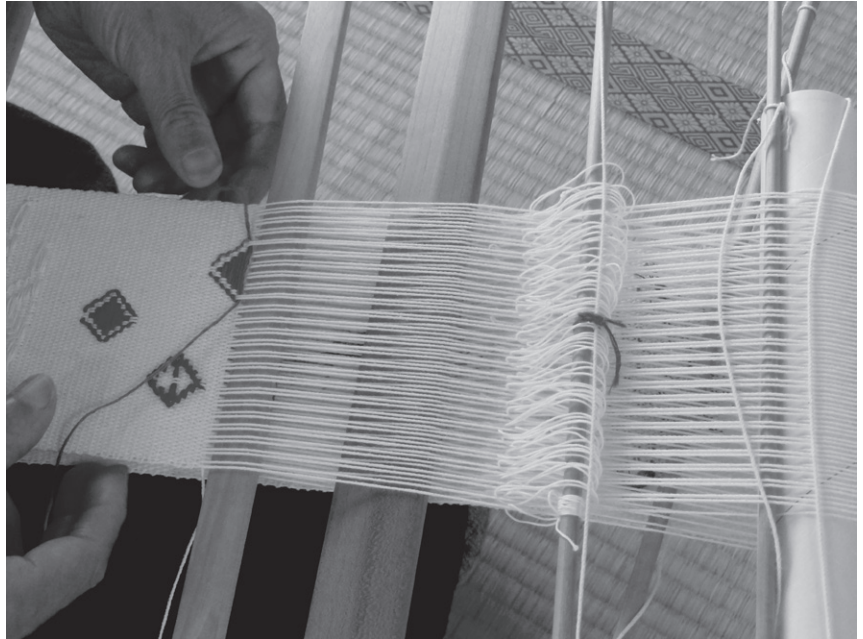
6 刀杼を通す



7 刀杼を立てて口を開く



8 文様を入れるための刀杼を通す



9 文様を入れる

《付記》

図A・図B・図Cは、現時点の調査で得られた情報をもとに作図したものであり、今後の調査で改訂される可能性がある。

参考文献

『染織辞典』日本織物新聞社 1931

角山幸洋『日本染織発達史』三一書房 1965

織田秀雄『きもの地』装道出版局 1977

渡辺誠「編布の変遷」『日本民具学会論集6 衣生活と民具』雄

山閣 1992

尾関清子『縄文の衣』学生社 1996

『世界の織機と織物—資料編—』国立民族学博物館 2013